

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32510

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320089

研究課題名(和文) 述語の意味と叙述タイプに関する統語論からの考察：機能範疇統語論の構築を目指して

研究課題名(英文) Syntactic Considerations of Predicate Meanings and Event Types: Towards Constructing Functional Category Syntax

研究代表者

長谷川 信子 (HASEGAWA, Nobuko)

神田外語大学・その他の研究科・教授

研究者番号：20208490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円、(間接経費) 1,290,000円

研究成果の概要(和文)：文の時制やアスペクトの解釈がどのように得られるのかを、精緻化した機能範疇構造と操作から、統語的に考察し、統語理論構築の発展に寄与することを目的とする。特に、総称文、状態性を持つ叙述文のタイプ、主節と従属節の時制解釈に焦点をあて、動作主主語が許されない「属性・総称解釈」「テイルの結果状態解釈」「連体修飾節における完了タと結果状態のテイルの交替」などの興味深い現象を取り上げ、それらの分析には、文のアスペクトを司る AspP が重要な役割を担っており、その範疇に許された操作により、同じ述語(vP)から複数の叙述タイプの派生を可能とする機能範疇統語論の試みを提示する。

研究成果の概要(英文)：This research project is mainly concerned with how the tense and aspectual interpretations of events, which are supposed to be relevant to lexical properties of predicates, can be syntactically captured. The phenomena taken up include the sentences of property ascription, dual interpretations of 'te-iru', progressive state and result state, and the interchangeability of perfective 'ta' and result state 'te-iru', which are to do with the presence or absence of an agent subject and/or of the generic interpretation on tense, and the stativity of a predicate. In explaining these peculiar phenomena, AspP, a functional category that takes place between vP and TP, and syntactic operations relevant to this category play a crucial role, by way of which more than one sentence type is given rise to from the same vP.

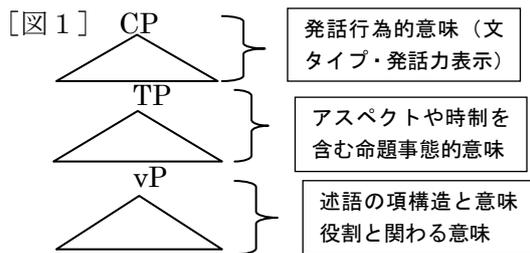
研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：統語論 機能範疇 アスペクト 属性解釈 時制解釈 日本語統語論 ミニマリストプログラム カートグラフィー

### 1. 研究開始当初の背景

生成統語論は、その変遷を俯瞰するならば、80年代後半までの、語彙範疇(特に動詞)情報の構造化と構造変換に関わる理論として構築され、意味の観点からは、主に、述語の項構造を基盤に命題・論理的意味の構造的把握が目指された。その枠組みでは、機能範疇(CPやIP)は、統語構造と操作の観点からは、あくまで付随的であり、それらは時制や補文標識を示す要素程度の役割しか担っていなかった。しかし、90年代から一気に、統語構造と操作に関わる認識が、語彙範疇(LC)から機能範疇(FC)へと焦点が移り、構造を構築し、移動などの操作を司るのは、LCやそれと関わる構造規則ではなくFCの持つ素性であり、その操作の帰結は、意味部門(および音韻部門)での解釈可能性を持つ理論体系として発展してきている。この枠組み(より具体的には、言語(統語)システムもヒトの認知体系の一部であるとするミニマリスト・プログラム(MP))では、統語構造が提示する意味には、「述語の項構造を基盤とした論理的意味」だけでなく、「述語の概念的意味」も「文の発話行為の意味」も含まれ、それらは、大枠で[図1]のような統語範疇との関係で捉えられる。



こうした構造を受け、考察すべき課題は、それぞれの機能範疇領域がどの程度の独立性を持ちつつ、お互いに関係しており、それを保証するメカニズムとはどのようなものかということである。このような課題に対し、研究代表者の長谷川は、2007-10年度の科研で、特にCP領域現象およびCPとTPの関連を日本語のモダリティ現象から考察し、FCの構造と働きに関し、以下のような知見を得てきた。

ア	FCが異なる意味レベル(発話、事態、述語概念)を統語的に結びつけ、文としての意味を構築する。
イ	CP、TP、vPには、各FCレベルでの意味・機能をより明確化したsub-headが存在する(Rizzi(1997)のSplit CP仮説を他のFCにも拡大する)。
ウ	(ア)の結びつけは、統語操作の基本の(相対的)局所性に従い、下位のFC(およびsub-headに対応するFC)と隣接上位の指定部および主要部に関わる。

こうした成果を受け、特に、(ア)、(イ)、(ウ)について、述語の意味と関わるvPと事態的意味のTP(ひいてはそこからさらに

CP)領域の観点から検証し、FCの役割と操作を精緻化することが、統語論全体のあり方・発展を推進することとなる。本研究課題は、その観点からの研究である。

### 2. 研究の目的

本研究課題は、上記[1.]の研究背景を受け、(ア)、(イ)、(ウ)のCP領域現象の考察から得られた知見と理論的主張を、TPとvP領域での現象の解明に適用し、FCのTPとvPにおける統語的役割を明らかにすることにより、検証する。具体的には、文の持つアスペクトと述語で指定されるアスペクト、(特に、状態性、動作主性、属性など)の関係を考察することで、述語の項構造や命題的意味(vP現象)が、文の論理的意味(真理値、時間的概念との繋がり)とどのように関わるかを考察し、それを解明する分析・枠組みの提唱を目指す。その試みでは、CP内部での複数のsub-headの指定部・主要部の(階層性と移動を可能にする)関係と同様のメカニズムが有効であることを想定し、vPとTPの構造と操作を明確化する。さらに、TPの主たる役割である「Event Time (ET)の時制解釈」について、それが上位構造(CP領域、さらには発話の場)で指定される「Utterance Time (UT)」と「Reference Time (RT)」の関係をFCがどのように統語的に保証するかを考察する。それにより、FCは、ヒトの認知的意味([図1]の3つの異なる「意味領域」)を統語的な構造と操作により繋ぐ役割を持つものとの仮説を検証し、「機能範疇統語論」を発展させる。

より具体的には、以下の観点から、所期の目的に迫る。

- ① 日本語は、主要部後置の膠着的な性質から、述語と相や態(使役、受動、自他交替、テイル他のアスペクトなど)の境界が明確ではないが、その境界にvPとTPおよびそのsub-headとしてのAspPなどのFCを想定し、その機能・役割から、統語操作と構造構築を司るシステムを追求し、そのシステムは、文の意味と関わる叙述のタイプ(e.g.属性)と主語の制約(e.g.総称性)などの解明に有用であることを示す。
- ② 述語の意味(vP)と叙述タイプ(TP)の働きを、統語操作と意味との関係から明らかにする。
- ③ TP(①②の考察によりvPから受け継ぐ情報を含む)での時制解釈が、上位構造(CPや発話の場)と如何に関わるかを、文の事態のタイプ、主文と補文の時制解釈の関係(いわゆるSequence of Tense (SOT))から明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究の課題は、「文の概念的意味と叙述の型に関わる機能範疇vPとTPの役割と操作の解明」であるが、その課題に対し、次の3つの観点からアプローチした。

- (1) 日本語の現象からの理論構築: 理論研究の基盤とされてきたのは印欧言語中心であるが、FCの現れ方と役割において印欧言語(特に、英語などの主要部前置、VOタイプ)と逆の主要部後置のOV言語の日本語の現象を詳細に考察することで、仮説を検証し理論を発展させる。
- (2) 研究遂行の基本: 本研究は長谷川の個人研究であるが、現象や先行の知見などの観点から、国内外の研究協力者との意見交換を通じ、柔軟に研究課題を発展させる。
- (3) 成果公表方針: 先行研究の知見や、本研究で得られた知見、比較対照となる分析などについては、研究会やワークショップなどを通じ、広く公表し、分野の活性化に貢献する。また、日本語の現象の考察やそこから得られた知見などの海外での認知は必然的にそれほど高くないことから、本研究の成果は積極的に海外での発表の機会を捉え、公表する。

具体的な研究の内容(上記項目の(1))は、理論構築が主に主語が動作主の活動・遂行述語の研究に偏ってきていたことに鑑み、本研究では、vPとTPと関わる現象については、文と述語の状態性に重きを置き、(a)述語と文のアスペクト(叙述の型、状態性との関係)に関わる統語構造；(b)日本語の中間態(自他と関わる形態素)を持つ属性描写文に関わる統語構造と操作；(c)主語の総称性と(a)(b)との関係の考察と統語的分析；(d)従属節の状態文とイベント文の主文との関わりにおける時制解釈、それにおけるvP-TP-CPの役割と操作、を重点的に扱った。(a)(b)(c)については平成23-24年度に、(d)については平成24-25年度に考察し、平成25年度にそれらを統合して体系化。各々の年度で、(2)と関わり、以下[4. 研究成果]の最後にリストした研究協力者他との研究会、ワークショップ、様々な機会での意見交換を通じ、考察を発展させ、(3)については、以下[4. 研究成果][5. 主な発表論文等]に記載してある事項を含め、その成果の取りまとめ・公表に力を注いできた。本研究期間終了後も、その成果をさらに発展させ、学会発表や論文の投稿、論文・研究書の執筆も含め公表の予定である。

#### 4. 研究成果

上記の研究項目(a)~(d)は、(a)はvPの内部構造と関わり、(b)と(c)はvPとTP両方からの考察が必要で、(d)はTPとCPの関係である。これらについて本研究で得られた主な、記述的&理論的結論と成果を以下の[A][B][C]にまとめる。[A]は、CP-TPにおける時制解釈の統語システム、[B]はvPとTPを巻き込む述語と文のアスペクトの関係を保証するシステム、[C]は、[A]のシステムの有用性を主文と従属文の間の時制解釈、いわゆるSequence of Tenseの考察からの検証である。

[A] 時制解釈の統語システム: 上記(a)~(d)に共通するのは、事態と時制をどのように捉えるかであるが、そのシステムとして、次のように提案した。単文(主文)の時制解釈は文全体(CP)のタイプ(最上位sub-headのForce)およびそれと連動して文の基本的な時制解釈(rudimental tense)を司るFinが関わり、TPのtenseに表れる具体的な形態は、Finからの要請により、完了(過去;タ)と未完了(現在;ル)となる。Forceは、時制(発話時、UT)と関わるか否かで、Indicative(叙述文)となるか、Generic(属性文、普遍的真実の記述文)となる。FinはForceと連動し、Generic文のFinは「時制無し(Universal Tense)」、Indicative文のFinは「時制有り」と指定される。Univ-TenseのFinは(歴史的真実でない限り)TPのTには「未完了形」を取る。ちなみに、以下、[C]述べるが、時制の解釈に束縛理論を適用するZagona(1990)やStowell(1995)の枠組み援用し、Finの「時制無し」指定はFree(上位のUTから束縛を受けない)であり、「時制有り」ではBound(上位の発話時UTから束縛を受け、UTをRTとし、その形態的具現はTPのTにUTより以前なら「完了形」、同時、以後なら「未完了形」となる。

この[A]は(長谷川の以前のCP領域における命令文や条件文などの考察から得た)文タイプと時制に関係する要素の出現に関わるCP内sub-headのForceとFinの役割と操作を、ZagonaとStowellのTPに関する知見を参考に発展させた結果得られたものである。

[B] 述語と文のアスペクト: 上記の[A]提案により、(a)、(b)、(c)の状態性・属性解釈などに統語構造の観点からの説明が可能となる。まず、(b)と(c)については「属性解釈と総称性」からアプローチし、阿部(1992)などによる一般化を統語構造と操作の観点から考察した。その一般化とは、属性解釈文は、動作主主語があってはならないこと、主語は(総じて)ハ格を取ること、時制辞は「未完了形」であることが条件となることである。(動作主主語の恒常的状态文は「属性解釈」ではなく、習慣表明の叙述文となる。)この一般化を統語的に把握するため、Univ-Tense解釈を持つFinにより指定されたTenseのEPP(それと連動する一致要素)は、動作主DPでは満たされないことを保証するため、それは、一般にDPではなくvP(もしくはVP)を指定部にとると想定した。これは、Collins(2005)の英語の受動文と完了文における分詞句(Participial Phrase)の認可に想定された、Smuggling操作と重なるが、これにより、動作主主語が、属性総称文の主語となることを防ぐことができる。TP指定部に移動してきたVP内のtheme項は、さらにCP内のTopP指定部に移動しハ格を受ける。TopPが活性化されることは、属性総称文が[A]に従い、特定のForceとFinを持つCP

であることから、可能となると考える。ここで問題となるのは、TP が vP を直接に選択しているとすると、TP の補部が TP の指定部に移動することになり、同一範疇の補部から指定部の移動は理論的に許されないことである。しかし、TP と vP の間に TP (もしくは vP) と関わる sub-head が存在すると想定するのなら、この問題は解決する。本研究では、そのような sub-head に AspP が存在すると考えるが、それにより、属性解釈文は、文のAspect AspP の具現の1つと考えることができるのである。この想定は、さらに、叙述文としての状態文のテイルの分析に発展でき、AspP は、属性状態文のみならず、叙述状態文にも関係する FC として、FC の構造と機能全体と整合性のある構造が得られるのである。

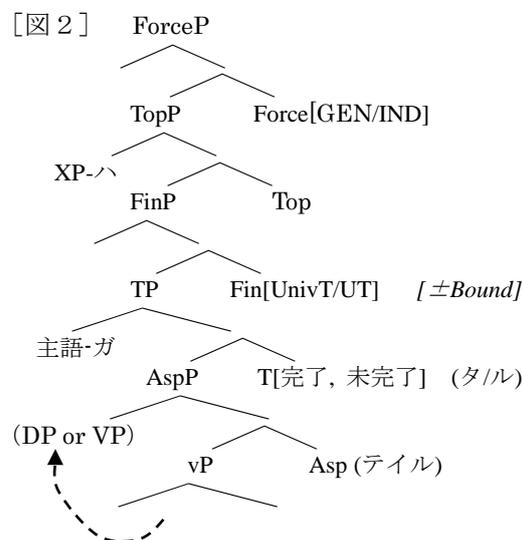
その「テイル文」についても、Smuggling 操作が働いていると考えると、テイルの「結果状態」解釈(ドアが開いている)と「進行状態」解釈(花子が走っている)の二面性を説明できる。つまり、テイルを持つ AspP は EPP 素性として DP を要求する場合と、VP を要求する場合との2つがあり、結果として得られる解釈が異なるのである。DP を要求する場合は、そこから最も近い要素として vP 指定部の動作主主語を引き上げ、事態の解釈としては、その DP の特性としての「進行状態」となる。他方、VP を引き上げる場合は、VP の「状態性」(それは、「結果状態」として解釈)を指定し、その theme 主語が TP 指定部に移動しても、その解釈に変化はない。ちなみに、テイルには状態述語を取ることはできないが(\*有っている)、それは、テイルと述語が同じ状態性指定することを嫌う経済性の観点からの排除と考える。VP がテイルの指定部に移動する操作は、竹沢(1991)で指摘されている「結果状態の解釈は主語が VP 内部から上昇してきた時」との一般化を、動詞句内主語内在節を踏襲しつつ説明するのである。もし、この Smuggling の適用をもう少し広く認めるなら、経験者主語の「結果状態」解釈(花子が髪を赤く染めている。父は胃の手術を受けている。)についても、テイルが VP を指定部に取るとの操作から説明が可能となると思われる。この可能性については、経験者主語構文一般の考察を深めつつ、さらに検討が必要で、今後の課題とする。

[C] 主文と従属節の時制解釈: 英語と日本語の従属節における時制解釈の一般化については、既に多くの先行研究がある。(Zagona (1990)、三原(1992)、Stowell (1995)、Ogihara (1996)、Kusumoto (1999)など) そうした知見から、特に Zagona と Stowell の束縛理論による時制解釈を発展させ、主文と従属節の関係を、従属節の CP 領域における Fin の性質 ([A] で提示した Free と Bound の違い) から導くことを示した。伝達・思考動詞の補文の解釈は、vP (AspP) が状態述語の場合、Fin が Free であるなら、主文の時制に縛られ

ることなく、UT に言及できることから、SOT の影響は受けない。Fin が Bound の場合は主文の時制を RT とし、主文の時制と相対的に Tense の形態に従い解釈されることから SOT の現象を示す。ただ、Kusumoto (1999) に従えば、Free の Fin (それと連動する Tense) は、UT だけでなく時の副詞などにも自由に言及できることから、完了形であっても主文と「同時」の解釈も可能となる。

関係節の場合は、補文と時制解釈が異なることが知られているが、特に、テイルが連体修飾として「結果状態」を示し、単純完了形態のタと交換可能となる現象(壊れているコップ vs. 壊れたコップ)は、動作主主語を明示できないこと、時の副詞などとの共起が許されないことなどから、CP も TP も持たない、AspP であり、AspP に VP が Smuggle され、その theme が関係節化された構造であると分析できる。この縮約節としての AspP 構造は、名詞節の「ガ格とノ格の交替現象」にも関わり、ノ格主語の節は時制辞と共起できないことなどから、ノ格主語の構造として捉えることも可能である。

上記、[A] ~ [C] により、時制やAspect と関わる節は、以下の [図2] のような構造をしており、時制解釈は、Force の指定する文構造との関わりで Fin が Free となるか Bound となるか、それらが TP 領域で各々どのような Tense 要素に具現されるかを決定する。文の状態性は、TP と vP の間の AspP により決定され、属性解釈といった動作主主語を持つことができない事態は、AspP が VP を Smuggle させる所から導き出す。つまり、主語の有無と時制解釈の可能性は AspP の指定部へ主語(動作主)の DP が移動してくるか、VP が移動してくるかに依るわけで、属性解釈には動作主主語の統語的存在が許されないことの説明となる。本研究では英語の中間態の分析までは手が回らなかったが、日本語の属性解釈の構造とその派生が援用できると思われ、AspP に VP が移動してくる構造が想定できる。



この本研究で提案する構造〔図2〕は Rizzi (1997)他のカートグラフィの枠組みでの構造に AspP を加えたのであるが、本研究課題で中心的に扱った、文の状態性と関わる統語現象には AspP の機能と操作が重要なのである。

本研究で提案した FC の構造と操作をまとめると、vP 内の項構造情報は、上位の叙述タイプと時制解釈により、動作主主語の有無にも影響を受ける。その変化は、時制解釈を司る FinP-TP 以前に起こり、特に AspP の役割が重要となる。AspP (また、Collins の受動文と完了文の分析を踏襲するなら VoiceP) は、その指定部に DP だけでなく VP (受動文・完了文の場合は ParticipialP) を移動させることができ、それが主語の有無を左右することとなり、同じ述語から異なる事態解釈をもつ複数の構造が派生されることが説明できるのであり、「機能範疇統語論」の中核的な操作と位置づけることができる。

最後に、[3. 研究の方法]の(3)の「成果公表」について、述べておきたい。具体的な発表論文などは、以下の[5. 主な発表論文等]に記載したが、それらを含め、本研究では、積極的な研究内容公開の活動も1つの重要な研究活動と位置づけた。先ず、毎年度、神田外語大学において、本科研と関わりコロキウム、ワークショップを企画・開催し、本課題の重要性と成果を公表し、国内外の研究者との意見交換を行ってきた。また、最終年度には茨城大学での「日本語学会第146回大会」においてワークショップを開催した。さらに、研究期間終了後となるが、平成26年11月の「日本語学会第32回大会」のシンポジウムにおいて本科研の課題の一部をより広い枠組み(生物言語学(藤田耕司氏)、日本語の述語形態論(西山國雄氏)、VoicePの普遍性と日本語の受動態(石塚智子氏)の中で考察する予定である。

【本研究の課題をテーマに企画・開催したワークショップ・コロキウム(含:予定)】

- 言語学コロキウム『日本語にも人称一致はあるか?』言語科学研究センター(CLS)・神田外語大学。(2011年7月13日)[発表者:宮川繁(MIT)、井上和子(神田外語大学)、長谷川信子。]
- 長谷川科研(B)ワークショップ『統語構造と時制・アスペクト』神田外語大学。(2012年6月22日)。(発表者:楠本紀代美(関西学院大学)、富岡諭(Delaware大学)、宮川繁(MIT)、長谷川信子。)
- 長谷川科研(基盤(B))ワークショップ『時制辞と時制解釈』神田外語大学。(2013年6月14日)[発表者:Tim Stowell (UCLA)、富岡諭(Delaware大学)、長谷川信子。]
- 『Workshop on Syntactic Structure and the Interpretation of Tense and Aspect』日本語学会第146回大会、茨城大学(2013.6.16。)[発表者:Tim Stowell (UCLA)、富岡諭(Delaware大学)、長谷川信子。]

- (予定)『動詞句とその周辺をめぐって:語彙範疇と機能範疇の役割』日本語学会第32回大会、学習院大学(2014.11.9)[発表者:藤田耕司(大阪大学)、西山國雄(茨城大学)、石塚智子(多摩大学)、長谷川信子]

#### 【研究協力者】

【海外協力者】 Timothy Stowell (MIT)、Audrey Li (USC)、Karen Zagona (ワシントン大学)、宮川繁 (MIT)、富岡諭 (デラウェア大学)、荻原俊幸 (ワシントン大学)、他。

【国内協力者】 有田節子 (大阪樟蔭女子大学)、楠本紀代美 (関西学院大学)、松本マシミ (神戸市外国語大学)、森山卓郎 (早稲田大学)、上田由紀子 (秋田大学)、他。

【神田外語大学学内協力者】 井上和子 (名誉教授)、栗原和生、藤巻一真、岩本遠億、上原由美子、本多正敏、大倉直子 (非常勤研究員)、真鍋雅子 (非常勤研究員)、他。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線) 英文のものは英語での発表である。

[雑誌論文] (計 5 件)

論文集に寄稿した論文も「雑誌論文」としてリストした。

- ① 長谷川信子 (2012) 「現代版「係り結び」としてのト条件節構文 —CP 構造における従属節と主節の呼応—」『日本語文法』12巻2号, pp. 24-42. (査読有り)
- ② 長谷川信子 (2012) 「空主語の意味解釈と主題化」 *Scientific Approaches to Language*, No. 11. pp. 17-46. 神田外語大学, 言語科学研究センター. (査読なし)
- ③ 長谷川信子 (2011) 「「所有者分離」と文構造: 「主題化」からの発展」長谷川信子 (編) 『70年代生成文法再認識 —日本語研究の地平—』 pp.85-121. 開拓社. (査読なし)
- ④ Hasegawa, Nobuko (2011) “On the Cleft Construction: Is it Simplex or Complex?”, *Scientific Approaches to Language*, No. 10. pp. 13-32. 神田外語大学, 言語科学研究センター. (査読なし)
- ⑤ 長谷川信子 (2011) 「統語構造と発話の力: 日本語の CP 領域現象から」武内道子・佐藤裕美 (編) 『発話と文のモダリティ』(神奈川大学言語学研究叢書1) pp. 89-114. ひつじ書房. (査読有り)

[学会発表] (計 16 件)

- ① Hasegawa, Nobuko. “Licensing a Null Subject at CP: Evidence from Japanese Main Clause Phenomena,” Workshop: Non-overt Subject in a Cross-linguistic Perspective, the 40th Austrian Conference on Linguistics, Salzburg University. (2013. 11. 22) オーストリア
- ② 長谷川信子. 「日本語の主語: 項と格と文

- 構造—統語論と日本語—」Morphology and Lexicon Forum 2013, 慶應義塾大学日吉キャンパス. (2013. 9. 8.) (招待講演)
- ③ Hasegawa, Nobuko. “Clause Types, Predicate Types, and Tense Interpretation in Japanese,” Workshop on Syntactic Structure and the Interpretation of Tense and Aspect. 日本言語学会第146回大会, 茨城大学. (2013. 6. 16.) (ワークショップ企画&発表)
- ④ Hasegawa, Nobuko. “Clause Types and Tense Interpretation in Japanese,” 長谷川科研 (基盤(B))『時制辞と時制解釈』ワークショップ. 神田外語大学. (2013. 6. 14.) (ワークショップ企画&発表)
- ⑤ Hasegawa, Nobuko. “Theoretical Linguistics in Japan,” the 50th Anniversary of the Department of Linguistics, University of Washington. (2013. 6. 8.) (招待講演) 米国
- ⑥ Hasegawa, Nobuko. “Clause Types and Tense Interpretation in Japanese,” Linguistics Round-Table, University of Washington. (2013. 6. 7.) (講演) 米国
- ⑦ Hasegawa, Nobuko. “The *To*-Conditional Clause as an Event Topic,” Formal Approaches to Japanese Linguistics (FAJL) 6, Humboldt University, Berlin. (2012. 9. 27.) (ポスター発表) ドイツ
- ⑧ Hasegawa, Nobuko. “Topics and Clause Types, and their Relevance to the Interpretation of Null and Lexical Subjects,” International Workshop on the Syntax/Semantics of Speech Acts and Embedding, 横浜国立大学. (2012. 7. 22.) (招待講演)
- ⑨ 長谷川信子. 「主語と時制・アスペクト: 属性と名詞節」長谷川科研 (B) ワークショップ『統語構造と時制・アスペクト』神田外語大学. (2012. 6. 22.) (ワークショップ企画・発表)
- ⑩ Hasegawa, Nobuko. “Voice: Transitive-Intransitive Alterations, Passives and Causatives in English, Japanese, and Chinese,” Department of Asian Languages, USC. (2012. 2. 29.) (講演) 米国
- ⑪ Hasegawa, Nobuko. “The Subject and the Interpretation of Tense in Japanese: The Veiw from CP” Linguistics Colloquium, Department of Linguistics, UCLA. (2012. 2. 28.) (講演) 米国
- ⑫ Hasegawa, Nobuko. 2011. 12. 9-10 “Judgment Styles and Syntactic Structure: Kuroda's thetic judgment revisited,” The 50th Anniversary of Linguistics, MIT. (2011. 9-11) (ポスター発表) 米国
- ⑬ 長谷川信子. 「従属節と主節の呼応 —ト条件節から主節の CP 構造を考える—」日本

語文法学会第 12 回大会 シンポジウム『複文研究の一視点 —時間と様相の相互作用—』東京外国語大学. (2011. 12. 3.) (シンポジウム講師)

- ⑭ Hasegawa, Nobuko. “Conditional Clauses as Contextualizers: The *To*-Clause in Japanese,” Workshop on ‘Conjunctions vs. Contextualizers: Between Clauses and Discourse Units, Prague’, Charles University, Prague (2011. 11. 18.) チェコ
- ⑮ 長谷川信子. 「日本語の主語と文末 (文タイプ) との一致」言語学コロキウム『日本語にも人称一致はあるか?』言語科学研究センター(CLS)・神田外語大学. (2011. 7. 13.)
- ⑯ Hasegawa, Nobuko. “The Cleft Construction of English and Japanese: A Simple Clause Analysis,” Spring Conference, 2011 English Linguistics Society of Korea (ELSOK), Kyunghee University, Seoul. (2011. 6. 11.) (招待講演) 韓国

〔図書〕 (計 1 件)

- ① 長谷川信子 [編・著]『70 年代生成文法再認識 —日本語研究の地平—』(xxii+366) 開拓社. 2011 年 11 月.

〔産業財産権〕 該当せず

〔その他〕

ホームページ等

<http://homepage3.nifty.com/nhasegawa/>  
(長谷川の個人 HP、本科研の研究課題と関わる研究概要・論文なども搭載)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川信子 (HASEGAWA NOBUKO)

神田外語大学・言語科学研究科・教授

神田外語大学・外国語能力開発センター・センター長

研究者番号: 20208490